

内容を決定したら「パスワード」を入力して「登録」ボタンを押す。



〔図書館メールサービス〕のページ

(5) 学務システムTWINSへのアクセス

学内のページではありますが、TWINSのページへアクセスする際も認証が必要になります。



〔認証〕を求めるポップアップ画面

パスワードがわからなくなってしまった時は？

利用証をお持ちのうえ、各館のレファレンスデスクまたはメインカウンターへお申し出下さい。

(システム管理係)

(4) 学外のWEBサイトの閲覧等

図書館内の端末（教育用計算機端末と図情図書館のWBT端末を除く）及び利用者が持ち込んで図書館のネットワークに接続したパソコンで外部のWEBサイト閲覧時に何らかの情報をインターネットに発信しようとする時、原則として認証が求められますので「ユーザ名」には「利用者ID」、「パスワード」には「パスワード」を入力してください。

開学30周年特別企画「活字と歩んだ筑波大学の30年」

筑波フォーラムのあゆみ

井 省三

手元の資料によると、筑波フォーラムの第1号が発行されたのは1976年3月となっている。第2号は翌1977年3月に発行されている。それ以後、第37号までは、記録に間違いがなければ、同じ年月に2号が発行されたり、年1号の刊行であったりまちまちの発行ペースである。現在のような年3号の発行ペースに落ち着いたのは第38号（1994年6月）からである。私が赴任したのは1989年8月だから、初めて読んだ筑波フォーラムは第28号（1990年3月）らしい。というのは、大きな声では言えないが手元には第38号からしか残してな

い。私が編集委員に命ぜられたのは第44号（1996年6月）からであるから、筑波大学・筑波フォーラムの歴史の半分しか歩いていないことになる。それでも現役の編集委員として最長老ということでこの原稿のお鉢が回ってきたようだ。半分は資料で、半分は体験で筑波フォーラムのあゆみを語ってみよう。なお、筑波フォーラム第50号で「50号の発刊を記念して筑波フォーラムの過去・未来を考える」という大変有益で貴重な特集が組まれている。

毎年の第1回の筑波フォーラム編集委員会で

「筑波フォーラム発行要領」という資料が配布される。これは昭和53年9月25日の学長決裁によるものだ。そこには「筑波フォーラムは、本学の教育改善に必要な資料を提供するとともに、広く大学教育の改革に寄与することを目的とする。」と謳ってある。新しい編集委員は、筑波フォーラムと教育との関連にちょっぴり驚くようだ。私が編集委員長を任せられていたころ(第56~61号)に、この教育の枠を広げて研究にも関連させようという意見が出たが、学長決裁の威光が大きかったためか、教育に関連した筑波フォーラムの目的は未だに変わっていない。

筑波フォーラムの構成は、手元の第38号あたりから、「漫筆漫歩」、「の眼」(ここしばらくは卒業生の眼)、「特集」、「私の提言」、「私の講義」、「研究室だより」、「学内トピックス」、「前号を読んで」が定番となっている。この内の特集の内容が毎号の新企画となっている。しかし、第39~50号(1994年11月~1998年7月)は10回のシリーズ「大学改革」の別特集が本来の特集のほかに組まれている。また、最近の第63号からは特集が「筑波大学の将来設計」というシリーズで組まれている。「研究室だより」、「学内トピックス」が定番になっていることから、筑波フォーラムが、必ずしも、教育改善の資料提供だけを目的にしてはいないことが分かるだろう。

65号までの特集を大雑把に分類してみると、やはり教育研究関連が一番多い(25)。この内訳では学群関連が中心のようだ。しかし、大学院関連も次点くらいに頻りに特集されている(7)。大学の将来関連も多く(8)、とくに法人化を迎えるここ最近ではシリーズの特集となっている。大学の国際化関連もまた多い(7)。これらの特集は、考えによっては筑波フォーラムないしは編集委員会のマンネリズムを表しているのかも知れない。しかし、筑波大学30年というそれほど長くない歴史のなかでたびたび取り上げられているということは、いまだに解決されてない問題であり、そもそも解決困難な問題なのかも知れない。

第1~65号までの執筆者の所属をみてみよう。

50号の「筑波フォーラム執筆回数ランキング」では、社会工学系(6.2%)、教育学系(5.9%)、学生・院生(5.7%)の順になっていた。50~65号までのデータを加えると、体育科学系(6.7%)、社会工学系(5.9%)、教育学系(5.5%)となっている。飛び抜けて多いあるいは少ない学系というのもないようだ。これは編集委員の選出区分(学長推薦(1)、学群長推薦(7)、企画調査室長推薦(4))によるものであろう。執筆者の決め方は、まず編集委員会で次号の構成を検討する。定番に2人ずつの委員を担当させ、特集には3~4人の委員を充てる。特集の執筆は学群長に推薦していただくという方式がメインになっているし、定番の担当委員は自分の周りから執筆者を当たっていくので、全体として執筆者が各学系に均等に割り当てられるようになる。多彩な領域からの意見(原稿)をいただくには、編集委員の再任を避けて、なるべく色々な教員に筑波フォーラムの編集委員を体験していただくのが良い。たとえ、同様な特集が組まれようともフレッシュな編集委員とフレッシュな執筆者が問題解決に一役買ってくれるだろう。

この原稿は「活字と歩んだ筑波大学の30年」という特別企画の一端を担っている。第1号は活字(活版印刷や和文タイプに用いる字型)を使って組んだのだろうか。少なくとも私が編集委員長を担当していたころ(56~62号)は電子出版であった。いつから筑波フォーラムは活字との歩みをやめてしまったのだろうか。印刷した文字または書物という意味での活字から見れば、筑波フォーラムはいまだに活字とともに歩んでいる。しかし、57号から電子図書館情報システムに登録され、執筆者、タイトルなどから筑波フォーラムが検索できるようになっている。この電子図書館システムで検索した筑波フォーラムの情報に当たるには、一次資料の「活字」の筑波フォーラムを手にとらなければならない。ところが、筑波大学の公式ウェブページ(ホームページ)では、特集記事に限られるが、「活字」ではなくPDF形式で筑波フォーラムを読むことが出来る。特集が大学のウェブページに載るようになったのは私が編集委員

長の時代からだから、電子図書館システムに登録された第57号だと記憶している。筑波フォーラムは30年あまりの歴史の最後（最近）の部分を「電子活字」とともに歩むようになっているのである。

最後に、私の編集委員長の体験から、特集のソースについてお話したい。毎年4月初めの評議会で決定された当該年度の年次計画が企画調査室から青色の冊子「平成 年度筑波大学年次計画について」として発行されている。この中の教育の部分の年次計画を特集のテーマに使ってきた。この執行部の年次計画を教員はどのように捉えて、どのように解決、実行しようとしているのだろうかという切り口が、果たして筑波フォーラムの記事に現われたらどうか。法人化を迎えるにあたり、筑波フォーラムは中期計画の教育の部分を集集テーマに選んでいくのだろうか。筑波フォーラムの始めの号では、筑波大学のアピールという特集が組まれているように感じたが、法人化され

て初めての筑波フォーラムはどのようなスタンスでこれからを歩んでいくのだろうか。

（たかい しょうぞう 体育科学系教授）



「筑波フォーラム」第50号

「筑波フォーラム」編集：筑波フォーラム編集委員会
発行：筑波大学企画部企画調整課
中央図書館本学関係資料室に所蔵

筑波大学図書館実務研修を終えて

榊原 幸子

私は平成15年10月5日から12月19日までの約2ヶ月半の間、図書館実務研修で筑波大学にお世話になりました。最初の1ヶ月ほどを中央図書館で過ごし、その後医学図書館で研修させていただきました。

現在私は茨城県立医療大学附属図書館で閲覧に関する仕事を担当していますが、業務内容が多岐にわたっているので、実際には広く浅く仕事をしているといった現状です。従って、筑波大学の様に係ごとに仕事が専門化している中での生活は初めてなので、正直戸惑いや不安もありました。しかし、皆さんがとても丁寧に指導して下さったおかげで、そういったものはすぐに払拭されました。そして、今まで自分が携わってきた仕事だけでなく直接の担当でない仕事もさせていただいたことで、改めて自分の仕事を客観的に見つめることができたと思います。

普段私はカウンターにいる時間はごく限られていて、直接利用者と接する機会はあまりありませんが、筑波大学ではカウンターにも多く出させていただきました。そこで感じたことは、国や年齢などの違う様々な方々が図書館を利用していること、そしてそのために語学力や様々な知識が必要とされることなどです。当然ながら利用者にとっては私も筑波大学職員と変わらないため、特にレファレンスでは質問もかなり多岐にわたっていて、自分の力不足、勉強不足を痛感させられました。そこで今後は図書館についてもっと知識を身につけ、データベースなども積極的に活用していきたいと思います。筑波大学で研修を終えた今、以前はもしかすると見過ごしてしまっていたようなことも自分なりに考え、問題点を見つけることができるようになったのではないかと思います。

初めの内はまだまだ先は長いなぁなどと感じて